

シャクヤクのさし木繁殖と繁殖株利用法の開発

第4報 株の養成方法と増殖過程

有野 賢三・水越 洋三・畠山 順三

(秋田県農業試験場)

Propagation by Leaf-Bud Cutting and Development of the Method
by Utilizing of Rootingstocks in Paeony

4. Process of propagation in different method of cultivation

Kenzō ARINO, Yozō MIZUKOSHI and Junzō HATAKEYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 ま え が き

シャクヤクは冷涼地において、品質の優れた切花生産が可能なることから、その特産化が望まれている。

これまでシャクヤクの繁殖は、株分けによって行われてきたが、この方法では繁殖効率が低く、また、線虫が持ち込まれるため、急速に生産力並びに品質の低下を来している。これらの問題点を解決するために、株分け繁殖にかわる全く新しいさし木による繁殖技術と増殖株の利用法を開発する目的で一連の試験を行なっている。

これまでに、さし木時期としては4月さし(早期さし)が良く、しかも低節位で安定的なクラウンの発生が期待できること。また、さし木の置床期間としては45日位が適当であること。更に、4月さしにおいては開花期ころまでに、採穂(さし木)する必要がある、6月さしではなるべく早い時期(5月中～下旬)にさし木する必要があるということなどを明らかにしている。

本報では、増殖株のクラウンの分化並びに地下部増殖の過程について養成方法とさし木時期をかえて検討したのでその結果を報告する。

2 試 験 方 法

(1) 試験区構成:

さし木 時 期	年 次 項 目	昭 55	昭 56	昭57	昭58
	a	5号鉢	5号鉢	5号・6号	5号・6号
昭54さし	6号鉢	5号鉢	5号・6号		
昭55さし	4月さし b	—	○	○	○
	6月さし c	—	○	○	○

※ ○鉢養成 ○露地養成
さし木時期— a …昭54.6.20, b …昭55.4.18
c …昭55.6.9

(2) 供試品種: サラベルナル

(3) 試験規模: 1区20個体

(4) 耕種概要: さし木方法…葉芽さし, さし木培地…山砂, 親株…促成株(昭55.4.18さし), 露地養成株(昭54.6.20さし, 昭55.6.9さし), 発根促進剤…IBA 0.5% 粉剤(粉衣処理)

材料は鉢養成の場合、鉢上げ後、露地で管理し、9月下旬に温室内に搬入した。11月10日から最低気温5℃で加温し2年目は露地で管理。

露地養成の場合、昭54さしは昭56.10.22に、昭55さしは昭56.6.16にそれぞれ所定の処理をした。

3 試験結果及び考察

(1) 昭和55年さし(露地養成)

地上部の生育過程をみると、株当たりの茎立本数は、さし木後3年目で6～7本となり、6月さしに比べ4月さしでやや多い傾向を示した。また、株当たりの開花茎数は、2年目で1～2本、3年目で3～4本となり、開花率でみると、さし木後3年目で65%となることが判明した。また、開花株率は、2年目で70%、3年目には90%以上になった。

切花長は3年目で60～70cmとなり、4月さしに比べ6月さしで優っていた。

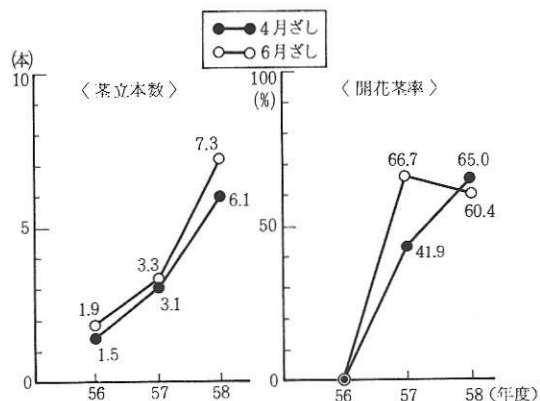


図1 さし木時期と茎立本数・開花率
(昭55年さし)

地下部生育量の推移をみると、塊根数は、さし木後の発根数を反映し、4月さしに比べ6月さしで多かった。

塊根重は、さし木後1年目では6月さしに比べ4月さしで優っていたが、その後は塊根数を反映して6月さしで優っていた。3年目には1.2~1.4 kgとなり、1年目の8~11倍の大きさであった。

芽数は、さし木後3年目で18~22個となり、1年間ではば2の階乗のペースで増加していくことが明らかとなった。

(2) 昭和54年さし、(鉢養成→露地養成)

地上部の生育過程をみると、茎立本数、開花茎数、開花茎率は、昭.56から昭.57にかけて、増加傾向が緩慢になり、特に、開花茎数と開花茎率で顕著であった。また、この傾向は6号鉢養成に比べ、5号鉢養成で大きかった。このように鉢養成による地下部生育量の制限は、地上部生育に影響を及ぼすことが明らかであり、鉢養成から露地養成に移しても、1年間はその影響が残る結果となった。

開花株率についても同じ傾向がみられたが さし木後4

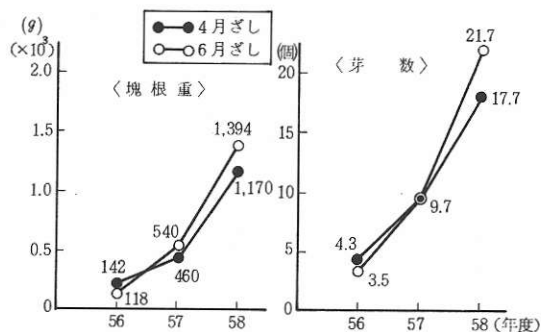


図2 さし木時期と塊根重・芽数(昭55年さし)

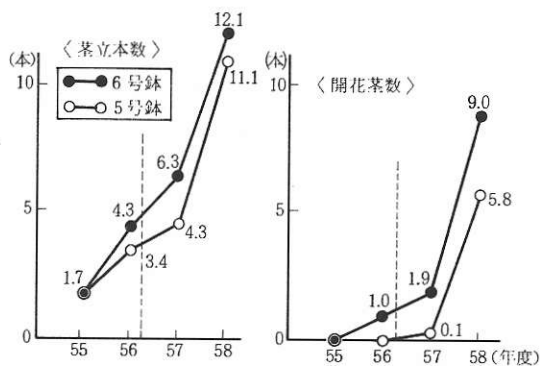


図3 養成方法と茎立本数・開花茎数(昭54年さし)

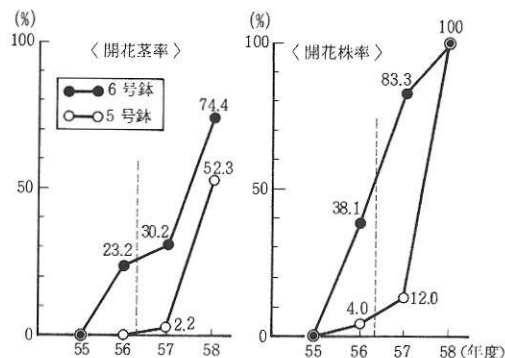


図4 養成方法と開花茎率・開花株率(昭54年さし)

年目で開花株率100%となり 地下部生育量制限の影響は小さいものと思われる。また切花長は4年目でも60~70cmとやや短く、鉢養成の影響が及んでいることがうかがわれた。

地下部の生育量をみると、塊根数に対する鉢養成の影響は全般的に少なかった。なお6号鉢養成株の塊根数は5号養成株に比べて多かった。

塊根重は昭.56から昭.57にかけて鉢養成の影響がみられ、全体的にはやや低い値となったが、昭.55(さし木後、1年目)に対比して昭.58(4年目)には5号鉢養成で17倍、6号鉢養成で20倍となった。また芽数はさし木後、4年目には30個となり、これに対する地下部生育量制限の影響は極めて少ないようにみられた。

以上の結果、芽数、開花茎率、切花長などから判断して、切花栽培はさし木後、4年目以降に行うのが実用的であると考えられる。

4 ま と め

地下部生育量を制限して生育させた場合は、その後、露地養成に移しても、その影響が残る、この影響は、地下部の生育に比べて地上部の生育、特に、開花茎数、開花茎率に顕著に現われることが明らかとなった。また、地下部生育量をみると、さし木後4年目で塊根重は約20倍、芽数は10~11倍となり幾何級数的に増加することが知られた。

開花株率はさし木後2年目で70~80%、3年目で90%、4年目で100%となった。また、切花長は3年目で60~70cmとやや短く、さし木繁殖の場合の実用的な切花栽培はさし木後4年目以降と考えられる。